

平成28年度大学コンソーシアムとちぎ「大学を超えた共同研究支援事業」報告書

所属機関名	作新学院大学女子短期大学部
団体・グループ等名	子どもの育ちと保護者支援を考える会
研究代表者名 (所属部署)	宍戸 良子 作新学院大学女子短期大学部 幼児教育科 講師
研究連携担当者名及び連絡先	・丸橋 亮子 (宇都宮共和大学 子ども生活学部 講師) ・齊藤 崇 (足利短期大学 こども学科 非常勤講師)
研究連携校名	・宇都宮共和大学 ・足利短期大学 ・作新学院大学女子短期大学部
関連自治体・経済団体等名	

1. 研究事業名	親子でつくる子どもの育ちポートフォリオ講座ー子ども理解のためのアセスメント方法「ラーニング・ストーリー」を活用した子育て支援ー
2. 実施年度	平成28年度・平成29年度
3. 研究成果等	<p><b>1. 講座実施の背景</b></p> <p>子どもの育ちを支援するためには、子どもがじっくり遊び込める環境があることと共に、子どもを取り巻く大人（以下、保護者と記す）が子どもの姿をどのように受けとめ、どのようなフィードバックを行うかが重要である。そのため、その場の楽しさを提供するような一時的な支援にとどまらず、その後も持続可能な子育て支援が必要であると考え。</p> <p>子どもの育ちのプロセスは多様であり、分かりやすいかたちで現れるとは限らない。そこで、保護者が今進んでいるその子ならではの育ちを捉え、可視化することを体験的に学ぶ機会を得ることは、意義のあることと思われる。</p> <p>以上の問題意識から、以下に示す子育て支援プログラムを開発した。</p> <p>自ら参加を希望する子ども（就学前）とその保護者（1地域につき10組程度）に向けて、以下①②を含む講座（2回完結・2時間）を、複数会場で実施する。</p> <p>①子どもに対し、自発的に遊びに向かうことを意図した遊び及びあそび環境の提供を行う。</p> <p>②保護者に対し、</p> <p>(i) ラーニング・ストーリー (Margaret Carr, 2001) の理論をもとに、子どもの学びの過程を捉えるための視点に関する学びを提供する。</p> <p>(ii) その後、実際に子どもの学びの姿を捉えたポートフォリオ作成の援助、助言を行う。</p> <p><b>2. 実施内容</b></p> <p>(1) ポートフォリオプレ講座</p> <p>【実施場所】作新学院大学女子短期大学部第3教育棟3階 模擬保育室</p> <p>【実施期間】①2017年3月16日（木）13:00～15:00 ②2017年3月30日（木）13:00～15:00</p> <p>【申込み・参加者】申込み：9組11名（子ども：9ヶ月～3歳） 当日の参加：①8組10名 ボランティア5名 ②7組 8名 ボランティア5名</p> <p>【実施内容】保護者：ポートフォリオ講座、子ども：発泡スチロールの遊びを同時進行で行った。</p> <p>※協力：株式会社カルックス（教材・発泡スチロール提供）</p>

(2) ポートフォリオ講座  
**【実施場所】** 芳賀町生涯学習センター1階 ふれあい室  
**【実施期間】** ①2017年6月11日(日) 13:00~15:00  
 ②2017年6月25日(日) 13:00~15:00  
**【申込み・参加者】**  
 申込み: 7組17名(子ども: 1歳~5歳1ヶ月)  
 当日の参加: ①7組16名 ボランティア4名  
 ②7組16名 ボランティア5名  
**【実施内容】** 保護者: ポートフォリオ講座、  
 子ども: 新聞紙遊びを同時進行で行った。  
 ※協力: 芳賀町地域子育て支援センターあっとほーむ

開催案内(表)



(3) ポートフォリオ講座  
**【実施場所】** 宇都宮市コミュニティー施設  
 総合コミュニティーセンター2階 和室  
**【実施期間】** ①2017年8月10日(木) 13:00~15:00  
 ②2017年8月24日(木) 13:00~15:00  
**【申込み・参加者】**  
 申込み: 14組32名(子ども: 1歳~10歳)  
 当日の参加: ①13組30名 ボランティア5名  
 ②10組22名 ボランティア5名  
**【実施内容】** 保護者: ポートフォリオ講座、  
 子ども: 新聞紙遊びを同時進行で行った。

本講座開催時のようす



3.成果

本研究では、本講座に参加した保護者を対象にアンケート調査を実施し、テキストマイニングの手法を用いて、自由記述データの分析を行った。調査における自由記述回答の項目に着目し、自由記述の中から、どのような傾向があると言えるのかについて探索的に研究を実施した。なお、記載は、紙面の関係上、分析の一部を抜粋して概要を報告する。  
 「気づき・発見・感想」について、共起ネットワークは図1のとおりであった。

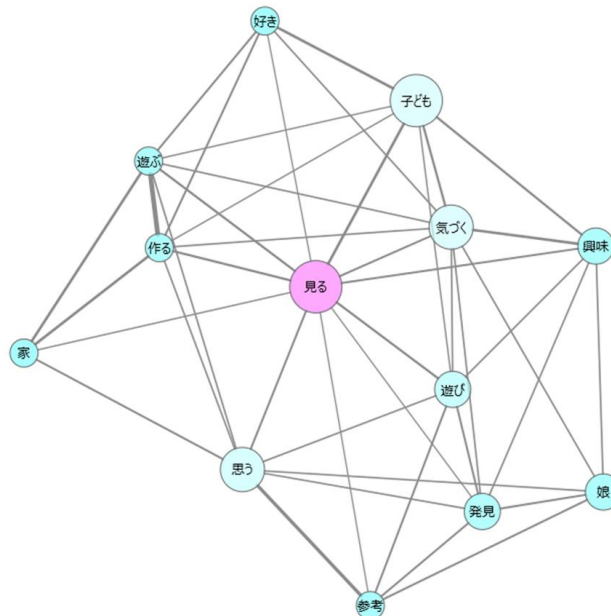


図1 「気づき・発見・感想」の共起ネットワーク

また、「気づき・発見・感想」についての形態素分析の結果については表1のとおりである。「見る」「子ども」が抽出語としては一番多く、次に「気づく」「思う」「興味」「発見」「遊び」「好き」「参考」などと続いた。さらに、「作成してよかったこと」についての共起ネットワーク及びその形態素分析の結

果を、それぞれ図2、表2に示す。

抽出語	出現回数
見る	5
子ども	5
気づく	4
思う	4
興味	3
発見	3
娘	3
遊び	3
家	2
好き	2
作る	2
参考	2
遊ぶ	2

表1 形態素分析

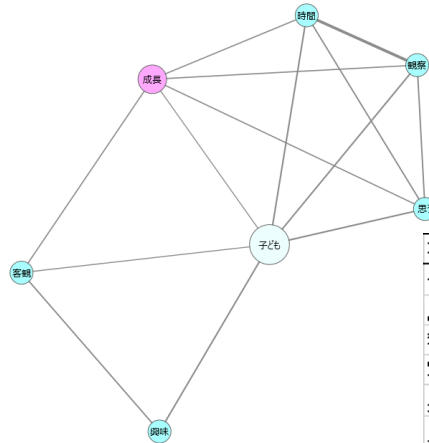


図2 「作成してよかったこと」の共起ネットワーク

抽出語	出現回数
子ども	5
成長	3
観察	2
客観	2
興味	2
思う	2
時間	2

表2 形態素分析

なお、「どのように変化があったか」という質問では、回答の「遊び」や「見る」といったワードが共起ネットワークでは、中心的な語であった。

#### 4. 考察

「気づき・発見・感想」について、参加した保護者は「見る」という抽出語を中心とした記述があったことを示された。このことは、保護者の気づきや発見といった手段として見る行為が介在することを示しているものと考えられる。「子ども」という抽出語が、突出して頻出語として現れていたのも、子どもの視点から考えるきっかけにつながった気づきが多かったと考える。さらに「作成してよかったこと」について「成長」という抽出語を中心とした記述があったことが示された。このことは、ポートフォリオを作成するに当たり、子どもを客観的に観察することで、学び・育ちの出発点となる我が子ならではの興味・関心を知る機会となり、その結果「成長」への理解につながったと考えられる。「どのように変化があったか」については、子どもの「遊び」を見る行為に示唆を与えた可能性があると考えられる。

以上のようなことから、子育て支援に「ポートフォリオ」を導入することは、保護者の子どもへの認知を変容させるきっかけになる可能性を含んでいると考えられる。

4. 今後の課題及び発展性

保護者及び子どもにとって講座は満足度の高いものであり、子どもの遊びにおける学びのプロセスを共有しながらの講座実施は、視点の伝達において効果的であることが伺えた。

保護者の気づき等から、2回連続での講座実施は妥当であるといえよう。

参加人数に関しては、子どもの姿を捉える視点の確実な伝達を考えると、10組程度が妥当であると考えられる。

今後も本講座を複数個所で実施できるとよい。

効果測定の方法は、課題である。今後検討を加えながら、引き続き継続実施していきたい。